

誠之小学校における ごみ減量の取り組み

文京区立誠之小学校 用務主事 小長谷 忠春

学校の可燃ごみの大半は、紙ごみと落ち葉です。これを減らす取り組みを昨年4月から始めました。誠之小学校には樹木がたくさんあり、年間の落ち葉の量はかなりのものです。4月は、さくらの花びらがあり、ヒマラヤスギなど常緑樹の葉が生え変わるので、かなりの量になります。草むしりした雑草も山になります。これらを、裏庭の一角に積み上げました。一学期で90リットルポリバケツ100杯を超えたので、山のようにになりました。しかし、この山はみるみるしぼんで小さくなりました。

二学期に入り、裏庭に木の囲いを作り、さくらなど腐葉土にするものと、イチヨウなど腐葉土に適さないものとに分けて入れました。それぞれ90リットルポリバケツに200杯は軽く超えました。とりわけイチヨウのピーク時は、児童が学校周辺の落ち葉掃きをしたので、連日20杯になりました。

更に樹木を剪定して出た枝は、90リットルポリバケツ100杯を超える量になりました。これをすべてごみに出さず、細い枝はガーデンシュレッダーでチップにして腐葉土に混ぜて堆肥にしたり、花壇に入れてマルチングにしました。落ち葉や枝などを合わせると600杯を超えるごみの減量になりました。

落ち葉と紙ごみの減量で 年間40万円の節約に

紙リサイクルにも積極的に取り組んでいます。小さな紙でもリサイクルできるという理解を広めていくために、ビン牛乳の紙キャップを集めています。毎日の給食のあと、牛乳キャップを一カ所に集め、水洗いして乾燥させ、リサイクルに出しています。年間ポリバケツ6杯のごみ減量になりました。学校の年度末は、大量の紙ごみが出ます。「捨てればごみ、分別すれば資源」を合言葉に、教職員が協力して取り組みました。ダンボール箱に詰めた紙の量は、2トントラックに積みきれないほどで、大量のごみ減量です。学校もごみは有料なので、落ち葉と紙ごみで年間40万円ほどの節約となりました。

誠之小学校では、児童もごみの減量に取り組んでいます。児童と教職員が努力してごみを減量している学校に、節約した一部を還元して欲しいと思います。23区で回収した紙資源で作られていた「みどりの夢」というトイレトペーパーが、8月で製造中止になります。世田谷区や台東区は、回収した紙を資源として、区のトイレトペーパーを作っています。文京区も区のトイレトペーパーを作り、努力している学校に還元したり、区民に使用してもらえば資源の循環サイクルがわかりやすくなるので、ごみ減量の促進になると思います。関係諸機関が協力して早く具体化されることを願っています。



2トンを超える年度末の資源ごみ



イチヨウなどを堆積した板囲い。手前がガーデンシュレッダー

第4回 ENB総会を開催

環境ネットワーク・文京（ENB）の2007年度 第4回総会が6月9日（土）、文京学院大学で開かれました。

総会では、澤谷精理事長のあいさつの後、第1号議案「2006年度活動報告」、第2号議案「2006年度決算報告」、第3号議案「2007年度活動計画」、第4号議案「2007年度予算」が審議され、全て承認されました。

総会の後、東洋大学・青木辰司教授による「グリーン・ツーリズム」についての記念講演【別掲】がありました。

休憩の後、第二部は場所をB's cafeに移し、会員、賛助会員、来賓を交えての交流会となり、懇親を深め、盛会のうちに終了しました。（星 紀巳枝）



総会記念講演

グリーン・ツーリズム — その意義と課題

東洋大学 社会学部教授 青木 辰司



グリーン・ツーリズムはホテルに泊まって観光する通常の旅行と違い、農山漁村地域で、その地域ならではの文化や自然、人との交流を楽しむ、滞在型でアクティブな休暇の過ごし方を指す。一過性でなく、一方通行ではない、そしてバーチャルではない、いわば「本物」の旅だ。

欧州では1970年代から急速に広まり、定着している。日本では90年代、中国、韓国、台湾へは2000年ごろから広まりつつある。現在は欧州型からアジア型へ、量から質、運動からビジネスへの転換期となっている。

今後、受け入れ側では、景観を守る事（住宅規制等）や、地域経営視点をもった人材育成、バリアフリーなどグリーン・ツーリズムが浸透し発展するためにいくつかの課題もある。だが、こういった点をクリアしていくことで、将来的には大都市から地方に行くだけでなく、地方から大都市にという、両方の発展にお互いが寄与できる、継続的な地域交流ができるのではないかと考えられる。

【詳しくは、グリーン・ツーリズムへの具体的な参加方法もよくわかる、青木教授が代表理事を務めるNPO法人「日本グリーンツーリズム・ネットワークセンター」のHP（<http://www.green-tourism.net/>）を参照されたい】

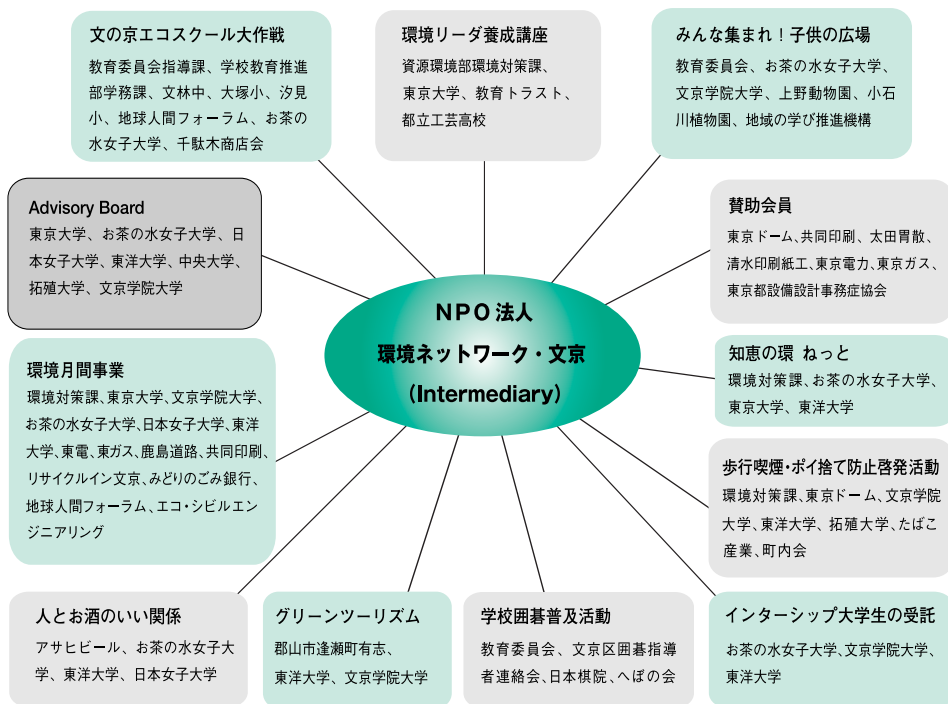
《ENB 4年間の歩み》

NPO法人環境ネットワーク・文京（ENB）は、文京区環境基本計画に基づき設置された「環境ネットワーク会議」で4年間の活動後、区民相互の交流、地域環境情報の収集・提供、区民の主体的な環境改善活動を区民のインターミディアリー活動で実現しようと、2003年5月に設立されました。特徴は、区内7大学15研究室より構成される“Advisory Board”を有し、大学専門家、また賛助会員7企業の強力な支援をいただいていることです。

これまで4年間、教育推進部指導課・学務課および区立文林中学校・大塚小学校・汐見小学校と連携して「文の京エコスクール大作戦」、また教育推進部庶務課と連携して「地域子ども教室推進事業“みんな集まれ！子どもの広場”」、資源環境部環境対策課と連携して「知恵の環 ねっと」の発行、「環境月間事業」、「環境学習リーダー養成講座」、「歩行喫煙・たばこポイ捨て防止キャンペーン活動」等の事業企画・運営、その他多岐わたる活動を推進してきました。

4年間の実績と協働パートナーを【図】にまとめてみました。（澤谷 精）

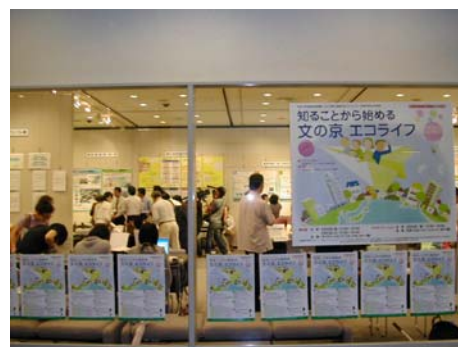
《目で見える ENB の協働パートナー》



今年の環境月間事業は「知ることから始める文の京エコライフ」

恒例の環境月間事業は、6月22日(金)・23日(土)に開催しました。今年は、都内62市区町村が「みどり東京・温暖化防止プロジェクト」として自然保護や地球温暖化防止対策を推進するための事業を実施します。文京区では環境月間事業をその事業と位置づけ、皆さんが「地球温暖化の防止」について取り組みやすいよう「エコライフ」をテーマにしました。

シビックセンター1階のギャラリーシビックで行われた展示会には、15団体が参加、会場には各団体の取組みや研究のパネルのほか様々な物品・資料が展示されました。並べられた樹木を当てるクイズ「この木なんの木?」では、「見たことあるんだけど・・・」と悩む姿が見られ、実験コーナーでは、ミニ燃料電池自動車を動かしたり大人も子どもも夢中で参加していました。大学の温暖化の解説やフードマイレージクイズも好評でした。



展示会場



クイズ



環境劇

地下2階区民ひろばの大型スクリーンを利用したプレゼンテーション(22日午後実施)では、大学・企業の発表に加え、今年は小学校のごみ減量の

取り組みや大塚小6年生が環境学習の成果として環境劇「地球SOS!」を披露しました。大塚小の子供たちは、総合学習の一環で来ていた第一中学校の生徒約80人プラス一般の観衆、保護者の方々が見守る中、いつも以上に緊張していたようです。100年後の未来から来た地球防衛隊

は「節電は電気を消すことだけではない。自分で考え、自分でやるのが大切」と現代の子供たちに教えます。最後の合唱「おそすぎないうちに(中山真理 作詞 作曲)」はとても感動したという声が聞かれました。

23日はエコ体験ひろばです。頭を悩ませて言葉を考え環境かるたを作ったり、自転車在必死でこいで発電しラジカセや扇風機を回したり、また、ケーナ(楽器)を作ったりエコ体験ひろばを実施しました。お昼時にフォルクローレの演奏があり、地下2階から流れる音楽に人が集まってきて、癒しのひとときとなりました。



講演会

23日午後は月間事業の締めくくりとして「地球温暖化問題の急展開」と題し、東京大学教授の住明正氏の講演が行われました。地球温暖化とは、人間社会がもたらした気象変化であること、温暖化問題は将来の問題であるが、ひとりひとりが現在の状況を理解し、今対処しなければ手遅れになると、わかりやすく講演してくださいました。

ライフスタイルでエネルギーの消費量は変わります。みなさんも生活の快適さを求めるだけでなく、省エネやアイドリングストップ、旬のものを食べるなどすぐにできることから始めましょう。



環境かるた

● 石川 紫のトライ・あぐる

北海道 洞爺湖サミットは“思いやりの精神”で

—連載②—

来年7月、北海道洞爺湖においてG8サミットが開催されます。今年は「成長と責任」をテーマにドイツ・ハイリゲンダムで開催されました。サミット終了後、安倍総理が記者団に、気候変動への対処が大変大きな、そして重要なテーマであった「(来年は)“環境立国・日本”として、環境、気候変動問題を主要な課題として取り上げていきたいと思う」と発言されたことから、環境問題に注目している私たちにも、来年のサミットは非常に興味深い会議となると思われます。

私なりに北海道洞爺湖サミットを3つの視点で眺めてみました。まず、第一の視点「すてき！ 環境、気候変動問題について世界の首脳が直接議論することで、問題解決に向けた対策が早急に提案されるわね！ サミット大賛成！」。第二の視点「ハイリゲンダムでは、反サミットのデモ隊と警官隊が衝突し千人以上の負傷者！ 税金も使うし治安も心配。サミット反対！」。

では、第三の視点は？ 私が考える第三の視点は、サミット開催につ

いてというより、そのシステム自体に対する疑問。「環境、気候変動問題は先進国も途上国も一緒になって取り組むべき課題なのに、たった8先進国首脳の話し合いで何らかの答えを出してしまっているのか？」。環境問題においては、先進国が問題を起こし、新規則を作り、そして途上国にも新規則への従属を乞うというパターンが多くみられます。では、途上国の立場に立った規則の立案を行っているのか？ そこには、疑問があります。

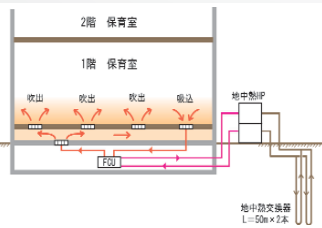
日本人には相手の立場に立って考え、行動する“思いやりの精神”が文化として根付いていると思います。私たちはこの文化に誇りを持っています。我が国で開かれる北海道洞爺湖サミットでは是非、この“思いやりの精神”を持って、G8のみならず途上国の立場にも立った視点で環境、気候変動問題に対する世界の方向性を議論していただきたいと考えています。

地球に優しい地中熱システム

地中熱は私たちのすぐ足元にある身近な自然エネルギーです。この地中熱を利用した保育園・キッズプラザアスク関町北保育園【写真】を紹介します。

この地中熱を使った空調システムは、地下50mの深さにボーリング掘削して設置した地中熱交換器素材はダブルU字ポリエチレンパイプ)で、冬は地中熱を採熱、夏は室内の冷房をヒートポンプで行うことで生じた廃熱を地中に放熱します。必要なエネルギーの大部分を地中熱で賄えるので大幅な省エネルギーができ、CO₂も削減されます。地中熱交換器には安全な不凍液が循環し、地中熱を取り出します。温まった不凍液はヒートポンプに熱を受け渡し、ヒートポンプで温められた温水で床下のファンコイルから温風を送り、床面を温める仕組みとしています。

自然エネルギーの柔らかな温かさを室内に供給し、環境にも人にも優しい快適な空調システムです。



このシステムは地中との熱のやり取りを行うことにより、夏期の冷房廃熱を空气中に放出しません。このシステムで異常気象の原因の一つといわれているヒートアイランド現象をストップさせることができます。

● システムのメリット

地中熱の利点は、(1) 地中温度は一年中安定していて、いつも熱エネルギーの供給ができる (2) 冷暖房や温水供給に必要なエネルギーの大部分を地中熱で賄うことが出来、省エネ・CO₂削減効果が大きい (3) 年間を通じて大地との熱のやり取りをおこなうことで、大気や地下水など周辺環境へ負担をかけず持続可能な社会を築くことができる——ことです。

私たちの会社は広島県の中間山地、ピオーネ種のブドウ畑に囲まれた町にあります。クリーンなエネルギーを日本中に広めたいと願うスタッフ一同で頑張っています。

(ミサワ環境技術株式会社・東京事務所 庄司 英喜)



情報コーナー

● みんな集まれ!! 子どもの広場 ●

* 第19回 ひげ博士の環境科学教室

～圧力から地球温暖化を考えよう! パート2～

◆日時: 9月1日(土) 10:00～12:00

◆会場: お茶の水女子大学
(担当: 竹田)

* 第20回 少年少女囲碁大会

◆日時: 9月2日(日) 9:30～16:30

◆会場: 文京区民センター3A会議室
(担当: 梅澤)

【お申し込み】

ENB (それぞれの担当)

メール: kodomonohiro-
ba2007@gmail.com



ENB 伝言版

● 新入会員の自己紹介

<柴田 晴通さん> このたび、柴田科学(株)の代表取締役を息子に譲ったのを機に、大石政俊様の紹介で入会いたしました。仕事でアメリカ滞在の折、友人とのお付き合いのなかで感じたことのひとつに、大変裕福でありながら夫婦ともに別々のボランティアに所属して、社会奉仕に熱心な方々にお会いして感銘を受けてまいりました。欧米なみに、日本でも新たに1000万人のご夫婦がNPOに参加してくれば“美しい日本”に相当近づくと信じて、知人、友人を勧誘していきたいと考えています。

<森本 高司さん> 民間シンクタンクの研究員です。環境政策に関わる調査・研究に携わっています。昨年、文京区に引っ越してきて、環境NPOはあるのか探していたところ、ENBを発見。HPを見たら非常に面白そうな活動をされていたので、入会しました。仕事柄、環境問題全般に興味を持っていますが、現在は環境教育、環境学習の分野に特に興味を持っています。ここ数年は、地球温暖化問題(そのなかでも温室効果ガス排出量の算定方法関連)の仕事をしています。この分野については多少の知識がありますので、何らかのかたちでみなさんの活動に貢献できたらと思っています。

編「集」雑「感」

〇…環境活動に携わるようになってから、1年。そこで、私は色々なバックグラウンドを持つ人たちに会いました。主婦の方や会社員の方、大学教員の方、学生の方……。何故、これほどまでに様々な立場の人々が参加しているのでしょうか? それは、環境問題は人間として生きている限り、誰にでも関係ある

問題だからです。

〇…環境問題は色々な人々が関わってこそ、解決の方向を見出せる気がします。私も学生会員の一人として、今後も様々な活動や「知恵の環 ネット」の編集にも積極的に関わっていききたいと思います。(萩)